

失われた「当たり前前の日常」

本章では、様々な角度から福島の被災現場の状況と県民の声を紹介していきます。ここでは福島県民が失ってしまったものについてひとつひとつ触れていきます。大切なものは失ってからはじめて気づくもので、それを知ること、大切にすべきものの本質が見えてくるのです。

原発事故で失ってしまったものを考えるとき、「当たり前前にあった日常」が真っ先に頭に浮かぶ方もおられるでしょう。東日本大震災と原発事故は、当たり前前のようにあった日常の暮らしがいかに尊いものであり、それを支えてきた安全がいかに脆いものであったかを如実に示しました。

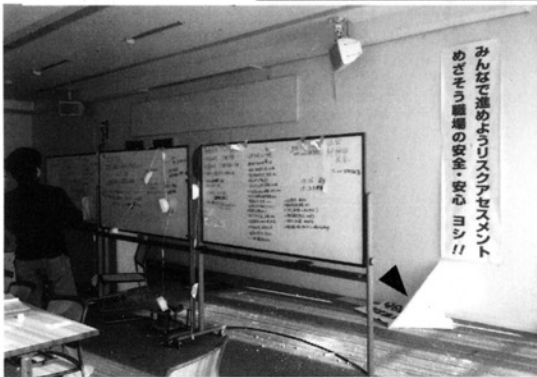
次頁にまとめた写真は、被災した富岡町災害対策本部内を撮影したものです。2011年3月11日、東日本大震災が起きたとき、この対策本部は東京電力の「ヒューマンエラー防止に関する研修」が実施されていたため、対策室の壁には「めざそう職場の安全・安心 ヨシ！」という言葉が書かれた垂れ幕が下げられたままになっていて、それがとても印象的でした。

この対策本部内は、現在でも被災当時のままの状態が残されています。ちなみに、東京電力の関連会社の方から伺った話では、かなり細部にわたった安全対策が実施されていたようです。たとえば、営業車両を運

災害対策本部内（富岡町）

地震によって天井が崩れ落ちてしまった視聴覚室の様子

この場所は「魔の間」と呼ばれていて、誰も近寄ろうとはしない。天井からの雨漏りがひどくその漏水を受けるためのバケツが一つ置かれている。（黒矢印）
(2013.11.16：富岡町)



災害対策本部内の様子
壁には「めざそう職場の安全・安心 ヨシ!!」と書かれた垂れ幕が、その下には「心の…」と読める垂れ幕が剥離したままの状態に残されている。（黒矢印）

(2013.11.16：富岡町)

散乱したままの状態に残された飲料水など

コーヒー・お茶の缶飲料・ペットボトル・紙コップ類のほか、頭部に着けるライトまでが当時のままの状態で見捨てられていて、蒸発固化した飲料水が時間の経過を物語っている。

(黒矢印)

(2013.11.16：富岡町)

